

随想

風評被害(その2)

自立した採卵業界であるために

加藤 宏光

九月九日の朝、テレビ朝日系「モーニングバード!」で福岡市において起きた風評被害についての報道があった。福岡市が原発事故に苦しむ福島を応援しようという運動を起こした。福島産の農産物を原料とした加工食品を直売市場に出品し、福島を応援しようという運動である。しかし、放射能を恐れる人々からの反対メールが二〇通ほど届いたため、中止の運びとなった、という。

メールの内容が酷い。福島ナンバーのトラックが来れば放射能をばらまく。もし、この運動が実施されたら不買運動を起こすというのである。主催者は市場側と話し合っただけでなく中止の決断を下した。

コメンテーターの吉永みち子氏は「東京で福島産の野菜果物を守る活動を続けている。多くの方は安全性が確認されている。中ば、迷わず購入してくれる。中には福岡市のメールと同じようなことを言う人もいるが、こうしたマイナーな意見で中止すれば、被災者を二度苦しめることになる。活動を起こすには覚悟がいる。二〇通の反対メールに真面目に対応してこそ運動が実る」と語る。まさに然りである。

報道によれば、販売予定の材料は三月十一日以前の産品であったそうだ。ならば、どうしてこんなに科学的でないメールへ対応せずに中止したのであるのか!? 日本人の悪しき行動パターンに、様子を見る、大勢に従う、

というものがある。大はやりしたビートたけし氏の言葉に「赤信号、みんなでわたれば怖くない」というものがある。日本人の個性をよく表している。

風評被害は判断を感情に委ねるところから発生している。今回の、カキ菜やホウレン草等の汚染に始まった原発事故に伴う風評被害は七月末の放射性セシウムに汚染された和牛肉の摘発以前はいったん鎮静化の傾向を示してしていた。しかし、金曜日に報道され、その翌週月曜日は、農場宛てのスーパーからの問い合わせが次々に来始めていたという。消費者の反応を先取りしたものであろう。これらの問い合わせは、生産農場が公的なモニタリングをはじめとした

検査を実施していることを説明することで納得された。また、バイヤーが求める情報を持たないケースでは、自主的に検査を実施し、証明書を提示することを要求される程度で治まっていた。

それからしばらくして、風評被害は別の様相を呈している(この現象は限定されたスーパーマーケットで起きている)。

スーパーへ「なぜ東日本の卵しか置かないのか?! 東日本産の卵では放射性汚染のリスクを避けられないのではないのか!」というたぐいの投書があったのだそうである。ここまで極端でないにしても、スーパーにとっては、和牛の放射性セシウム汚染の発生以来、電話による安全

